

## Jリーグ移籍に関する考察

松 原 悟・高 橋 信 二

**Abstract** In organizations of sports, conjugations are always found. Particularly, the constitution of the player is an important element. Therefore, the team makes an effort for the continuation of the new employment and contract every year.

The federation of J spread to 40 teams in 2012. There are many problems with the growth of the J team. However, in shallow Japan of the professional sports culture, experience to run the sports team strategically is short. There are few excellent talented people running the team. It is expected that there is the case that a team will go bankrupt in the future. In a meaning to bring up sports culture, it will cause a big loss. Many studies are necessary to solve such a problem. The problem of the transfer will be the one.

Therefore I decided to think about the problem of the transfer of the J team. As a result, about this problem, I was able to compile many opinions.

### 1. はじめに

社会に存在する様々な組織を考えると、経済的基盤、組織のコンセプトや目的、構成メンバーや役割など、多くの要素を含んでいる。それらの中で、組織は、新陳代謝を繰り返し、淘汰されていくものである。成長する組織には、優秀な人材が集まり、さらなる成長が期待できる。学校教育においても、毎年卒業生と新入生が存在する。

スポーツ、特にチームスポーツにおいても、その組織が一定以上の成果を上げ、且つ継続的に進展するためには、新陳代謝は必要である。したがって、各スポーツ共に、シーズンが終了すると、その年の評価が行われ、トレードといった形で、指導者、選手の新規採用や契約継続などが行われ、マスコミなどを賑わしている。

1991年に設立したJリーグは、「日本サッカーの水準向上」、「地域に根ざしたスポーツクラブ」および「豊かなスポーツ文化の醸成」を目標として、2011年に20年を迎えた。2011年では、43チーム（準加盟5チーム含む）にまで拡大し、2012年は、J1が18チーム、J2が22チームで開催されている。プロチームを立ち上げ、維持存続に精一杯の時代から、それぞれが、強固な組織を形成することが望まれる段階に来ている。経済的基盤をどうするのか、試合会場を含めた練習場、クラブハウス、下部組織などの環境的な整備、そして、トップチームの戦力として、指導者、選手をどう組織し、維持していくのか、Jチームの在り方は、

作る段階から、成長する段階にきているといえよう。特に、戦力に関しては、良い結果を出し続けることのできる指導者、選手は存在しない。スポーツの結果という側面から考えれば、キックオフからの 90 分後には、勝敗は明らかとなり、優勝するチームも 1 チームしか存在しないからである。勝者と敗者が必ず存在する性質上、成功者と失敗者が存在し、失敗者のほうが多いのがスポーツである。指導者・選手に求められる戦術、技術、体力、精神力とともに、戦略的見地からのビジョンを持たなければならない。

指導者の能力、指導陣の構成、選手の人数、選手の能力を着実に評価し、現実の戦いと将来の戦いに向けてどのような準備をしているのかということは、非常に大切な問題である。しかしながら、プロスポーツ文化の浅い日本においては、戦略的にスポーツマネージメントをする経験が不足しており、人材も不足しているのが現状である。

現在好調を維持しているベガルタ仙台でも、2003 年シーズン途中から監督となったベルデニックは、2004 年シーズンを迎えるに当たり、監督の基本戦術である 3 - 5 - 2 システムの運用から、大量にサイドバックを放出したが、2004 年シーズンで結果が出ないために解雇となり、引き継いだ都並敏史監督は、4 - 4 - 2 システムの採用者であるため、大量に放出したサイドバックを、新たに加入させるという補強を行った。両監督とも結果を出すことはできなかったが、チームの組織づくり、選手構成に迷走する一端がみられよう。

2012 年に 40 チームの J チームが存在するが、経済的な基盤が強固であるとはいいがたい。少ない投資で有効な結果を求めるためには工夫と分析が必要である。特に、シーズンが終了してから、新たなシーズンを迎える間に行われる移籍の問題は、各チームが戦略的意図、ビジョンをどう現実化していくのか興味深い問題である。チームが作られてから、20 年たつチームから、つい最近できたチームまでが混在する中で、明確なビジョンが示されなければ、単なる勝敗のみに左右され、存続の危機を迎えるチームが多数存在することが危惧される。このようなビジョンと現実を考える上で、シーズン終了後からシーズン開始までの移籍の問題を研究することは、非常に重要なことと考えられる。

サッカーの移籍に関しては、新規に加入する選手、在籍自体を移す完全移籍、他チームからのレンタル、レンタルされた選手の返還（レンタルバック）、引退、解雇されたが移籍できない未定選手などに分類できる。そこで、本研究では、2011 年シーズン終了後から 2012 年シーズン開始までの時期に、J チーム所属選手の移籍状況より、新規加入選手、放出選手、残留した選手を分析することから、J リーグチームの移籍に関わる問題を考察し、移籍の問題点について研究することを目的として行った。

## 2. 方法

2011年Jリーグ終了時点での、選手データと2012年Jリーグ開始直前の選手データより、新たに加わった選手、放出された選手、残留した選手について、それぞれ選手の状況、年齢構成と2011年シーズンの出場時間等から、Jチームの移籍について考察を行った。尚、集計に際しては、2011年、2012年Jリーグ公式記録を参照し、年齢に関しては、2011年での年齢とした。対象選手は、表1、表2に示すように、2012年J1選手539名（残留選手68% 新加入選手32%）、J2選手643名（残留選手58% 新加入選手42%）、2011年J1選手544名（残留選手67% 移動選手33%）、J2選手618名（残留選手60% 移動選手40%）である。

表1. 2012年所属選手の動向

内訳	J1 (人)	J1 割合 (%)	J2 (人)	J2 割合 (%)
残留選手	364	68%	370	58%
新加入選手	175	32%	273	42%
合計	539	100%	643	100%

表2. 2011年所属選手の動向

内訳	J1 (人)	J1 割合 (%)	J2 (人)	J2 割合 (%)
残留選手	364	67%	370	60%
移動選手	180	33%	248	40%
合計	544	100%	618	100%

## 3. 結果

### 3.1 加入選手について

#### (1) 加入選手全体について

加入選手全体については、表3に示す通り、J1、J2チーム共に移籍がもっとも多く、年齢構成は図1に示す通り、高校、大学卒業時年齢が最も多い値を示した。また、加入選手の外国・国内選手の内訳は表4に示す通りである。

#### (2) 日本人新規加入選手について

日本人新規加入選手については、表5に示す通りで、J1チームでは、ユースからの昇格

表 3. 加入選手の内訳

内訳	J1 (人)	J1 割合 (%)	J2 (人)	J2 割合 (%)
ユースからの昇格	27	15%	17	6%
新卒・新規	34	19%	50	18%
移籍	71	41%	128	47%
レンタル	22	13%	57	21%
レンタルバック	21	12%	10	4%
下部チームから	0	0%	11	4%
合計	175	100%	273	100%

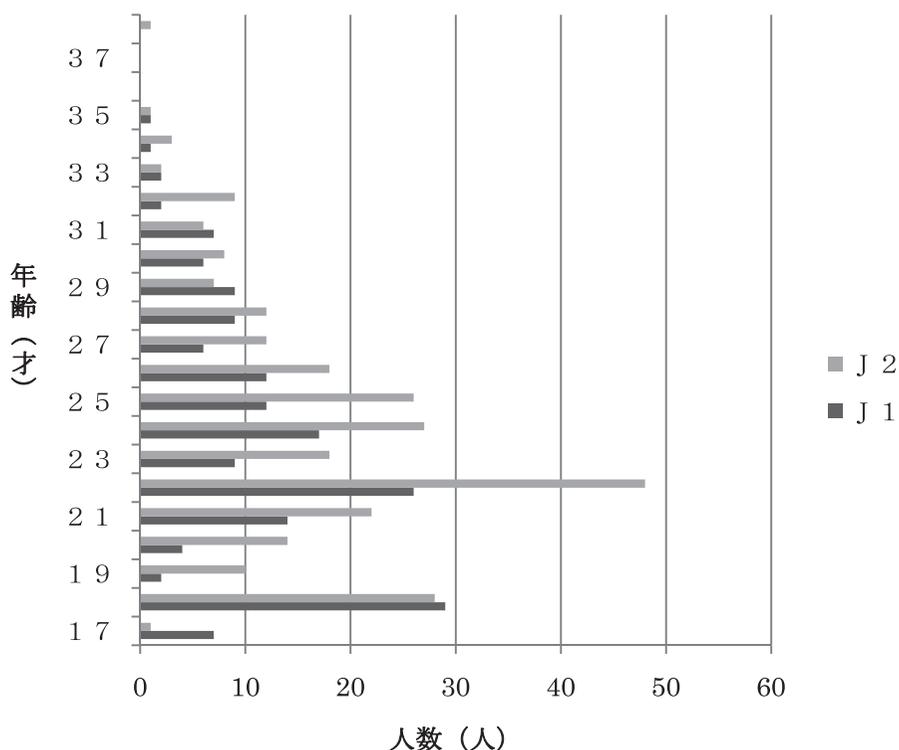


図 1. 加入選手の年齢構成

が最も多く、J2 では大学卒が最も多い値を示した。

(3) 日本人移籍加入選手について

日本人移籍加入選手については、表 6 に示す通り、J1 チームでは、同じ J1 チームからの、J2 チームでは、J1 チームからと同じ J2 チームからの移籍が多い値を示した。年齢構成は図 2 に示す通り、J1 では 24 歳が最も多く、J2 では 24 歳、25 歳が最も多い値であった。また、2011 年シーズンの出場割合は、J2 移籍の 25% 以下出場が最も多い値であった。

Jリーグ移籍に関する考察

表 4. 加入選手の外国・国内選手の内訳

内訳		J1 (人)	J1 割合 (%)	J2 (人)	J2 割合 (%)
外国	新規	8	24%	7	23%
	移籍	14	41%	14	47%
	レンタル	10	29%	8	27%
	レンタルバック	2	6%	1	3%
	合計	34	100%	30	100%
国内	ユースからの昇格	27	19%	17	7%
	新卒	26	18%	43	18%
	移籍	57	40%	114	47%
	レンタル	12	9%	49	20%
	レンタルバック	19	13%	9	4%
	下部チームから	0	0%	11	5%
	合計	141	100%	243	100%

表 5. 日本人新規加入選手の内訳

移籍の内訳	J1 (人)	J1 割合 (%)	J2 (人)	J2 割合 (%)
ユースからの昇格	27	51%	17	28%
高校	7	13%	9	15%
大学	19	36%	34	57%
合計	53	100%	60	100%

表 6. 日本人移籍加入選手の内訳

移籍の内訳	J1 (人)	J1 割合 (%)	J2 (人)	J2 割合 (%)
外国から	5	9%	3	3%
J1 から	31	54%	49	43%
J2 から	21	37%	57	50%
その他	0	0%	5	4%
合計	57	100%	114	100%

(4) 日本人レンタル加入選手について

日本人レンタル加入選手については、表 8 に示す通り、J1、J2 チーム共に J1 チームからのレンタルが多く、年齢構成は図 3 に示す通り、J2 での 23 歳が最も多かった。また、2011 年シーズンの出場割合は、表 9 に示す通り、J2 レンタルの 25% 以下出場が最も多い値であった。

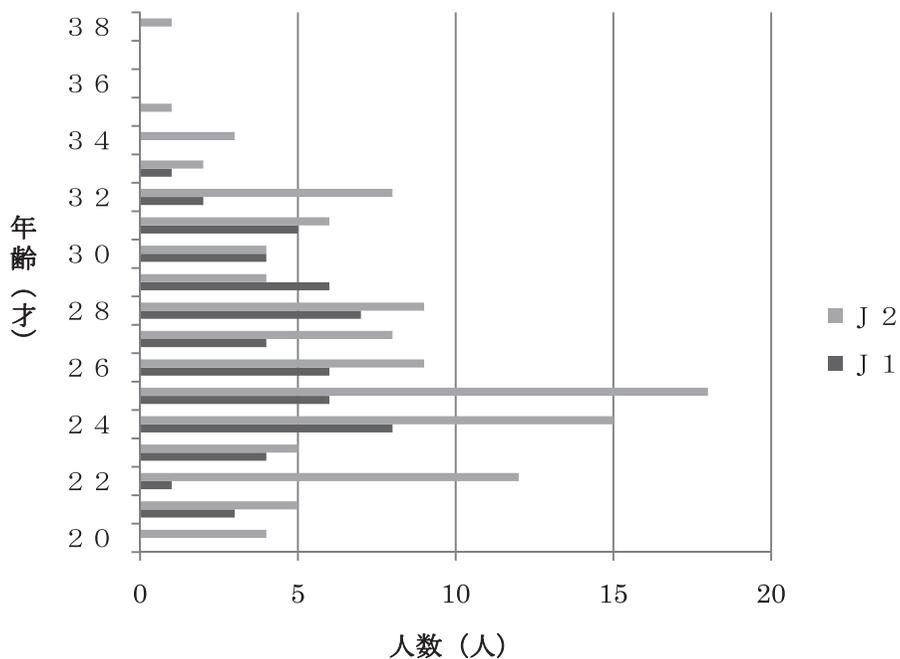


図 2. 日本人移籍選手の年齢構成

表 7. 日本人移籍選手の前チームでの出場割合

内訳	J1 (人)	J1 割合 (%)	J2 (人)	J2 割合 (%)
出場無	3	5%	12	11%
25% 以下	11	19%	40	35%
50% 以下	13	23%	26	23%
75% 以下	12	21%	15	13%
100% 以下	13	23%	9	8%
不明	5	9%	12	11%
合計	57	100%	114	100%

表 8. 日本人レンタル加入選手の内訳

内訳	J1 (人)	J1 割合 (%)	J2 (人)	J2 割合 (%)
外国からのレンタル	1	8%	0	0%
J1 からレンタル	8	67%	36	73%
J2 からレンタル	3	25%	13	27%
合計	12	100%	49	100%

Jリーグ移籍に関する考察

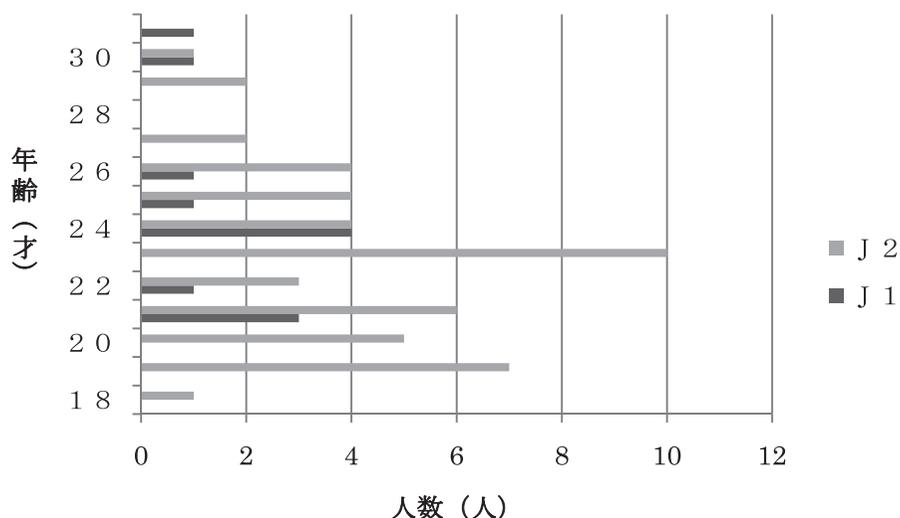


図3. 日本人レンタル加入選手の年齢構成

表9. 日本人レンタル加入選手の前チームでの出場割合

内訳	J1 (人)	J1 割合 (%)	J2 (人)	J2 割合 (%)
出場無	2	17%	16	33%
25% 以下	2	17%	18	37%
50% 以下	3	25%	3	6%
75% 以下	2	17%	6	12%
100% 以下	2	17%	2	4%
不明	1	8%	4	8%
合計	12	100%	49	100%

(5) 日本人レンタルバック加入選手について

日本人レンタルバック加入選手については、表10に示す通り、J2～J1へのレンタルバックが最も多く、年齢構成は図4に示すように、J1での22歳、23歳が多い値を示した。また、2011年シーズンの出場割合は、表11に示すように、J1にレンタルバックした100%以下出

表10. 日本人レンタルバック加入選手の内訳

内訳	J1 (人)	J1 割合 (%)	J2 (人)	J2 割合 (%)
外国からのレンタルバック	0	0%	0	0%
J1 から	3	16%	4	44%
J2 から	16	84%	4	44%
その他	0	0%	1	11%
合計	19	100%	9	100%

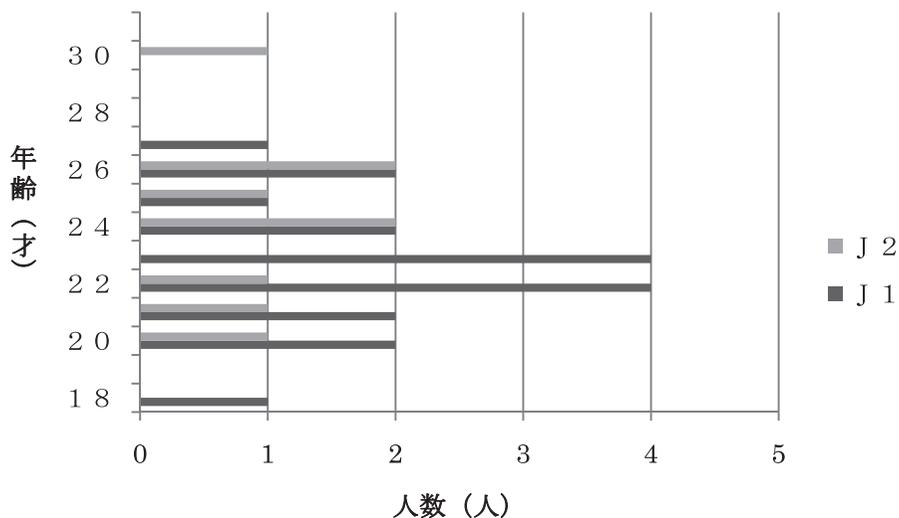


図 4. 日本人レンタルバック加入選手の年齢構成

表 11. 日本人レンタルバック加入選手の前チームでの出場割合

内訳	J1 (人)	J1 割合 (%)	J2 (人)	J2 割合 (%)
出場無	3	16%	2	22%
25% 以下	4	21%	2	22%
50% 以下	4	21%	0	0%
75% 以下	0	0%	1	11%
100% 以下	8	42%	1	11%
不明	0	0%	3	33%
合計	19	100%	9	100%

場が最も多い値であった。

### 3.2 放出選手について

#### (1) 日本人放出選手について

日本人放出選手の内訳は表 12 に示す通り、J1、J2 共に移籍が多い値を示した。外国人については、J1 チーム 33 人、J2 チーム 37 人が放出されている。

#### (2) 引退選手について

引退選手は、表 13 に示すように J1 チーム  $30.5 \pm 3.38$  歳、J2 チーム  $30.1 \pm 3.76$  歳であった。また、2011 年シーズンの出場割合は、表 14 に示すように 25% 以下が最も多い値を示した。

#### (3) 日本人放出選手で行く先未定の選手について

日本人放出選手で行く先未定の選手は、表 15 に示すように J1 チーム  $24.4 \pm 4.49$  歳、J2 チーム

Jリーグ移籍に関する考察

表 12. 日本人放出選手の動向

内訳	J1 (人)	J1 割合 (%)	J2 (人)	J2 割合 (%)
移籍	84	47%	103	42%
レンタル	47	26%	24	10%
レンタルバック	9	5%	30	12%
引退	6	3%	26	10%
ユースから未昇格	18	10%	14	6%
未定	15	8%	48	19%
リハビリ	1	1%	0	0%
進学	0	0%	3	1%
合計	180	100%	248	100%

表 13. 引退選手の年齢

内訳	J1	J2
n	6	20
M±SD	30.5±3.38	30.1±3.76
MAX	35	40
MIN	22	21

\* J2 不明者 6 人を除く

表 14. 引退日本人選手選手の出場割合

内訳	J1 (人)	J1 割合 (%)	J2 (人)	J2 割合 (%)
出場無	2	33%	3	12%
25% 以下	3	50%	11	42%
50% 以下	1	17%	4	15%
75% 以下	0	0%	1	4%
100% 以下	0	0%	1	4%
不明	0	0%	6	23%
合計	6	100%	26	100%

表 15. 未定日本人選手選手の年齢

内訳	J1	J2
n	12	41
M±SD	24.4±4.49	25.8±4.14
MAX	34	40
MIN	16	18

\* J2 不明者 7 人を除く

表 16. 未定日本人選手選手の出場割合

内訳	J1 (人)	J1 割合 (%)	J2 (人)	J2 割合 (%)
出場無	4	33%	16	33%
25% 以下	6	50%	16	33%
50% 以下	2	17%	4	8%
75% 以下	0	0%	3	6%
100% 以下	0	0%	2	4%
不明	0	0%	7	15%
合計	12	100%	48	100%

ム  $25.8 \pm 4.14$  歳であった。また、2011 年シーズンの出場割合は、表 16 に示すように 25% 以下が最も多い値を示した。

### 3.3 残留選手について

#### (1) 残留選手について

残留選手の 2011 年シーズンの出場割合は、表 17 に示すように、まったく出場せずに残留した選手は J1 チーム 17%、J2 チーム 7% であった。また、残留選手の年齢構成は図 5 に示すように、J1 チーム 25 歳、J2 チーム 24 歳が多い値を示している。

表 17. 残留選手の出場割合

内訳	J1 (人)	J1 割合 (%)	J2 (人)	J2 割合 (%)
出場無	61	17%	22	7%
25% 以下	93	26%	82	25%
50% 以下	43	12%	82	25%
75% 以下	69	19%	78	24%
100% 以下	98	27%	66	20%
合計	364	100%	330	100%

\* J2 昇格 2 チームを除く

## 4. 考察

### 4.1 加入選手について

加入選手全体については、J1 新加入 176 人 (32%) J2 新加入 273 人 (42%) であった。J1 に関しては、優勝を目標としているチーム、残留を目標としているチームなど、その目標に差があるが、トップリーグに所屬している分、有力な選手が多く加入選手数も比較的少ない

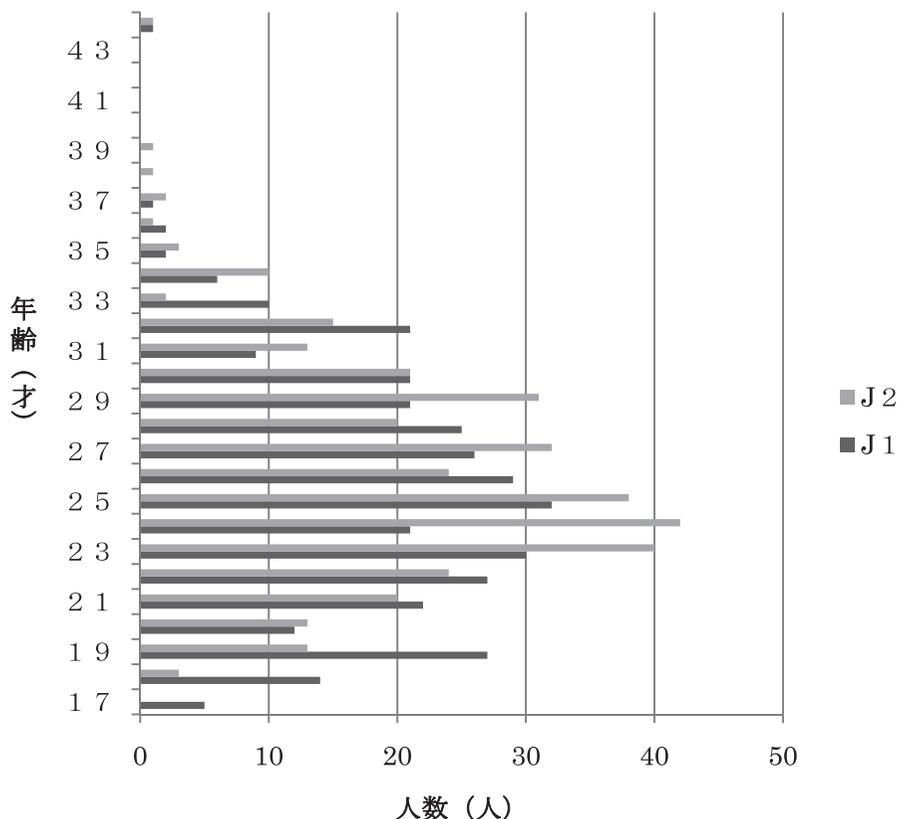


図5. 残留選手の年齢構成

といえよう。一方、J2に関しては、J1から降格、J1昇格を果たせなかったチーム、昇格して間もなく地力をつける段階のチームである。降格、昇格できなかったチームは、その結果から、補強が必要となり、地力をつける段階のチームにおいては、選手の整備が必要である。この様なことから、42%という約半分近くが新加入選手という結果に反映されたといえる。年齢についても、18歳、22歳が多いのは、ユース、高卒、大卒の新規加入が集中しているからである。出場機会を求めて他チームに移籍するケースとしては、第一段階が19歳から21歳にかけて、第2段階が24・25歳前後と考えられよう。当然ながら、年齢が高くなるにつれて難しい状況となる。

加入選手の内訳は、J1、J2共に他チームからの移籍が40%を超えており、他チームからの移籍が多い。このことは、新規の選手よりも、プロとしての経験を持ち、即戦力として、活発に選手の移籍が行われていることが伺える。

新規に加入する選手では、J1ではユースからの昇格が、J2では大卒の選手が最も多い。J1においては、有能なユース年代の選手が集まりやすく、またチーム結成から年数も長いチー

ムが多いために、順調に選手を育てているチームが多いと考えられる。一方、J2 に関しては、結成間もないことや、戦力整備のために、育てた選手よりも、即戦力として期待できる大卒の選手を雇用する傾向がみられる。高校の部活動からの加入が低くなっていることは、ユース年代の選手がプロチームの下部組織に多く所属ようになってきたためと考えられ、今後も高校部活動からの加入は厳しい状況となるであろう。

日本人の移籍による加入は、当然ながら、J1、J2 での交流が多いが、J1 が 24 歳以降、28 歳前後に集中しているのに対し、J2 では、32 歳の移籍も多く、ベテランの採用も多い。また、J1 では、2011 年シーズンの出場割合が高い選手が多く、J2 においては比較的出場割合が低い選手が多くみられる。出場割合が高いということは、チームにとっては主力となっているケースであり、その選手が移籍するということは、チームにとっても損失である。より高いサラリーを求めてか、より出場機会を求めてかは、今回の調査から判明しないが、今後の研究課題であろう。

レンタル選手については、J1 からのレンタルが多く、年齢も 20 歳前後、24 歳前後の選手が多い。2011 年の出場割合が低く、若い年代の選手が、より出場機会を求めてレンタルされる、又は、レンタル先のチームでは、戦力の不足を補うために、現役プロ選手のなかから出場機会に恵まれない若手をレンタルしていることが考えられよう。

レンタルバック選手は、J2 からのレンタルバックが多く、注目したいのは前年度出場割合が  $3/4$  を超える選手が 8 人 (42%) という点である。レンタルバックとして考えられるのは、レンタルしたけれども、戦力として厳しいので元のチームに戻す、レンタル先で十分成果を上げ元のチームに戻ってくることなどが考えられる。選手としては、出場機会を求め、実力を高めるためにレンタルを受け入れるわけであり、実力を身につけてレンタルバックする選手は限られていると考えられる。

#### 4.2 放出選手について

放出選手は、他チームへの移籍が最も多い。その他、レンタルに出る選手、特に J2 では、戦力とならなかつた選手をレンタルバックするケースも考えられる。

引退する選手は、J2 が 26 人と多く、年齢も 30 歳前後であった。ほとんどの選手が、出場割合が減り、年齢と共に引退ということであろう。

放出されたものの、次のチームが決まらない選手は、J1 で 12 人、J2 で 48 人であった。年齢も平均で 24、25 歳前後である。J1 の選手は、移籍も含め J2 など可能性が高いが、J2 で放出される場合は、次のチームを探すことはかなり難しい。2011 年 J1 チーム所属選手が 544 人、J2 チームが 618 人であるから、J2 においては、約 8% ほどが失業ということとなる。

#### 4.3 残留選手について

残留選手については、チームの中心選手として残留するケースと、これから戦力となるであろう選手としてのケースに分けられるので、当然ながら、出場割合も高い選手が多く、23歳から30歳の選手が多い。サッカーのチームとしての戦力は、年齢が23歳から30歳ぐらいで、かつ選手としての経験も必要であるから、試合経験も重要な要素である。

#### 5. まとめ

Jリーグチームの移籍について、所属選手の移籍状況から、新規加入選手、放出選手、残留した選手を分析することから、Jリーグチームの移籍に関わる問題を考察し、移籍の問題点について検討した結果、以下のとおりである。

- ・移動対象となる選手は、J1で1/3程度であり、J2ではJ1より多い傾向がある。
- ・加入選手については、移籍が戦力補強の中心となっている。
- ・移籍に関しては、J1からJ2が多く、レンタル、レンタルバックなど選手の交流が活発である。
- ・新規に加入する選手は、J1ではユースからの昇格が、J2では大卒選手が多い。
- ・引退する選手は、出場機会が減ってきた30歳前後が目安となる。
- ・放出された場合は、J1では移籍の可能性が残るが、J2では1割弱の選手が次のチームが未定の状況となる。
- ・チームの戦力の中心は23歳から30歳で、試合経験の多い選手である。

プロサッカーチームに限らず、スポーツは結果が伴うものである。日本人のオリンピックへの関心の高さは、東京オリンピックからであろうが、日本サッカー界をみれば、固定されたメンバーで、東京、メキシコと結果を伴ったときは注目されるが、それ以降は、長い低迷の時期を迎え、今日があるといってよいだろう。その他の競技においても、総じて、日本人は、新陳代謝が得意ではない。これは、チーム戦略、マネージメント能力の経験不足といえよう。特にサッカーにおいては、23歳から30歳の選手が主力であり、この期間での試合経験が豊富でなければ、戦力とはいえない。これらの年代を中核として、いかに次世代を育成、補強していくかは重要なことである。プロ野球と異なり、レンタル制度のあること、選手の市場が大きいことなど、新陳代謝の資源は豊富に存在している。また、国内においても、プロユースチーム以外の環境として、少年団から大学までのサッカーが盛んであり、レベルも決して低いものではない。外国のように、プロユースチームに所属しない限り、プロ選手になれないという限られた条件ではない。この豊富な資源を活用するためにも、短期、中期、

長期的な戦略性が必要であろう。

選手の立場にたっても、様々なカテゴリーからプロ選手になることはアプローチできても、23歳から30歳の短い期間の中で結果を出していかなければならない。特に23歳前後で出場機会を得なければ、失業も視野に入れなければならない。プロサッカー選手としていかにあるべきかを自覚する必要があるだろう。ユース年代からの選手は約4年間、大卒の選手では1年間の時間しかないのである。

Jチームの増加と、20年という時間は、多くの経験を我々に示してきた。今後は、これらの諸活動から得られた資料を蓄積し、活かしていくことが重要である。今後とも研究を継続していくことが必要である。

#### 参考文献

- フロムワン編 (2008) 「愛するサッカーを仕事にする本」 アスペクト
- グローバル・マーケティング研究会 (2009) 「日本企業のグローバル・マーケティング」 白桃書房
- 五島祐治郎 (2009) 「大学サッカーの断想」 晃洋書房
- 濱口博行 (2010) 「日本はサッカーの国になれたか。電通の格闘」 電通
- 広瀬一郎 (2010) 「極私的サッカー見聞録」 東邦出版
- 今福龍太 (2008) 「ブラジルのホモ・ルーデンス」 月曜社
- Jリーグ公式サイト (about J) <http://www.j-league.or.jp/aboutj/> 2011年12月
- J'sGOAL <http://www.jsgoal.jp> 2012年2月
- 松原 悟 (2011) 「選手構成からみた高校・大学サッカーの現状東北学院大学教養学部論集第160号: 39-35
- 宮澤永光他 (2009) 「現代マーケティング」 ナカニシヤ出版
- 文部科学省ホームページ (スポーツ スポーツの振興) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/05\\_a.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/05_a.htm) 2011年11月
- 谷塚 哲 (2008) 「地域スポーツクラブのマネジメント」 カンゼン